



(2012 ロンドン五輪男子フルーレ団体戦)

## 『ROAD TO 2020～組織委員会／スポーツマネジャーからのメッセージ～』

### 「フェンシングの団体戦の価値」

私は、小学校5年か6年の頃、父親の赴任で滞在していたドイツで、現地の方から誘われフェンシングクラブに通い始めました。ドイツ語はさることながら、英語もまだまだ話せないなか、見たことも聞いたこともないスポーツを紹介されたわけですが、何もかも全くわからない状況でした。

その後、私が日本に帰国した際、フェンシングは限られた中学校・高校・大学の教育機関でしか部活動がなく、プライベートのフェンシングクラブも関東でも数えられるほどでした。中学生ながらにして理解したことは、当時の日本ではまだまだフェンシングの競技人口が少なく、認知度も低いため、フェンシングをする場所を探すのは簡単ではないということでした。

今でこそフェンシングクラブが増え、インターネットの普及で誰でもクラブの情報を得られるようになりましたが、教育機関におけるフェンシング部の数は、それほど変化していないのではないかと思います。それどころか、現在は運動部そのものが減少しており、フェンシング部を新設することはおろか、既存の運動部を維持することを優先せざるを得なくなっております。現在、フェンシングの競技人口のうち約

40%を高校生が占めていますが、卒業後の進学先にフェンシング部がないことが多く、フェンシングをやめる比率が高くなっているのが現状です。

2014年頃から、国際フェンシング連盟ではクラブ・モーション・イニシアティブを掲げ、世界フェンシング界の発展のために各国に存在するクラブチームの強化に乗りだしました。日本でも、教育機関の運動部に加え、クラブチームのさらなる増加と発展が期待されています。学校教育期間にとらわれないクラブチームの存在は、競技者がいつでも気軽にフェンシングを行う場所として、ますます重要な存在・受け皿になってきているのではないのでしょうか。

ただ、クラブの発展は今後の日本フェンシング界にとっても重要であると認識しているものの、依然として日本では教育機関におけるフェンシング部の存在意義はまだまだ高く、フェンシングを通して社会性、人間性、協調性を養う重要な役割も担っており、選手・指導者としてだけでなく、多岐にわたって活躍されているフェンシング経験者を多く輩出し続けています。

その一役を担っているのが、団体戦による体験です。小中学生の団体戦の試合数はまだまだ少ないですが、歴史的な背景から大学の運動部にてフェンシングの団体戦が多く行われてきています。大学の4大会と言われているのが、東西のリーグ戦・王座決定戦・関カレ・インカレ、その他に大学間の定期対抗戦などがあります。

今後、こういった大会や団体戦そのものの価値を高められるような工夫やブランディングができないかと思っています。

たとえば、これまでの試合観戦といえば大学運動部の関係者のみが応援している状況でしたが、団体戦の醍醐味や観戦ポイントを普及させることによって、関係者だけで盛り上がるのではなく、クラブ出身者やフェンシングをしたことがない方々でも観戦を楽しめるような環境づくりを行うことです。具体的に言えば、競技日程の再検討があげられます。試合が平日開催の場合、誰もが応援に来られるよう夜に開催を何試合か試みるなど、一案として挙げられるかもしれません。もう一つは学生選手のブランディングです。某アイドルグループとファンの関係のように、特定の選手にだけ関心をもって応援することです。指導者の立場では公平性の観点から特定の選手に限定せず、部やチーム全体を応援せざるをえませんが、それ以外の方々、いわゆる一般のファンや観戦者であれば可能ではないかと思います。特定の選手やチームにファンがつけば、それが他の選手やチームへと波及し、チーム全体の応援体制が形付けられ、チームや大会の価値が上がる・・・という発想の転換も考えられます。

フェンシングは、一般的に個人スポーツとして捉えられていますが、ほかのチームスポーツと同様団体戦を楽しむことができます。現在の団体戦はイタリアンリレー方式という競技フォーマットが主流となり、チーム内に「ポイントゲッター」「抑え」「チームの雰囲気巧みにコントロールするリーダー」等、色々な役割を担い、互いを高め合う選手たちを垣間見ることができるようになってきました。監督やコーチが、個性豊かな選手たちを、最高のパフォーマンスが発揮できるように対戦相手との組み合わせを考

え、良いタイミングでアレンジ（選手交代）させることによって勝利に導きます。そのような多くの団体戦が、多くの観客のもとで繰り広げられ、日本フェンシング界の底力になっていくことを期待しています。

そして2020年オリンピックには、それぞれ6種目においてどのような個性と強みをもった選手がラインナップされ、どのような日本らしい団体戦を繰り広げられるのか。2018年後半、多くの団体戦を国内で観戦することができます。より多くの方々に、日本のフェンシング界における今後の動向を見守り頂けますと幸いです。



JAPAN	MEN'S FOIL TEAM	GERMANY
4 CHIDA K.	4/4	JOPPICH 4
4 OTA YUKI	0/2	BACHMANN 6
8 MIYAKE R.	4/2	KLEIBRINK 8
15 CHIDA K.	7/4	BACHMANN 12
18 MIYAKE R.	3/2	JOPPICH 14
28 OTA YUKI	10/9	KLEIBRINK 23
31 MIYAKE R.	3/2	BACHMANN 25
33 CHIDA K.	2/5	KLEIBRINK 30
41 OTA YUKI	8/10	JOPPICH 40

(2012年ロンドン五輪準決勝チームスコア)